

「NBK 大阪ブロック 第 1 回経営者講話会」要旨

日 時：平成 21 年 12 月 9 日（水） 15:00 ～ 16:00
場 所：株式会社ユニオン 2 階会議室
講 師：谷岡 一治（株）タニオカドレス 代表取締役

モード屋が見た「大阪商人の歴史と今昔」

ご紹介を頂きました。タニオカドレスの谷岡でございます。

本日は 大川真一郎大阪ブロック会長のご要請を受けて、講師の大役をお受けすることになりましたが、私は、商人でございます、政治家や評論家の先生方のように、話を上手にまとめることは出来ませんが、最後までよろしくお願いを申し上げます。

1) 空腹がもたらしたハングリー精神

私の 70 年の人生を振り返ると、幼年期には日中戦争・太平洋戦争が大きく横たわっております。昭和初期に世界的な大恐慌があり、我が国は資源不足と国民の貧困から、やむにやまらず戦争に突入したのだと思います。しかし理由はどうあれ、軍部の一部が大変無謀で悲惨な戦争を仕掛けたのだと思います。

私は、その様な波乱な時代の昭和 10 年（1935 年）12 月に兵庫県、但馬の豊岡で生を受けました。

私たちの世代は「戦争」と「破壊」と「飢え」は切り離せない時代でございました。戦中戦後の食料と物資が不足の時代でも、生きる知恵があれば、結構楽しい思いをした人もいます。どんな時代も快樂はあるものだと思いますが、大半の国民は貧困と飢えに苦しんでいました。歴史的な運命に翻弄されたこのような時代は、世界的に民族全体の問題ですから、我々個人も辛抱が出来たのだと思います。戦中生まれの世代の根性やハングリー精神は、慢性的な空腹で磨いた辛抱が根底にあると思います。

ハングリー精神は養ったかもしれませんが、あの様に惨めな空腹を二度と味わいたいとは誰も思いません。私たちは、多くの先人や先輩達の犠牲の上に今日の幸せがある事を決して忘れてはなりません。

先年、ボルネオ島に行きました。ブルーネから入り、ミリとムルまで行きましたが、ジャングルの中では野ヒルと蚊の大群に襲われる所でした。日本兵はつらい死の行軍を強いられた事でしょう。戦争を許しては駄目ですよ。特に敗戦は惨めなものです。

昭和 20 年 8 月、第二次大戦は敗戦という形で終結しました。混乱期の中で昭和 25 年頃に朝鮮動乱が勃発して、米軍から軍事景気の贈り物がありました。日本は隣国の不幸な戦争で、飢えと貧困の時代を脱し復興に向かいましたが、敗戦国には違いがありません。昭和 27 年頃までは、電車に乗りますと進駐軍専用列車通過のために一時停車をしますと言われた時代でした。

まだまだ敗戦の混乱が続く中で、私は田舎出の貧乏医学生でしたから、田舎の親からの仕送りだけではやっていけません。都会の学友達は裕福な医者の子が大半ですから、彼らと付き合うには背伸びの生活になります。生活費のほかに遊ぶお小遣いも欲しかったので、本町にあった親戚の羅紗屋とアパレル屋で、アルバイトを一生けんめいやりました。肝心の勉強のほうは深夜にすること

が大半で、24時間フル稼働の青春時代でした。現在の学生の皆さんの姿とは格段の差を感じます。

2) 時代の流れのなかで学生創業

前置きはこれくらいにして、今日まで創業50年の歴史を刻むことになったのは、医学生だった私が生活費を稼ぐために親戚のアパレル屋でバイトをしたことがきっかけでした。

その当時、羅紗屋は年間2ヶ月で一年暮らせる時代でした。いわゆるガチャマン時代、糸偏産業が国の基幹産業でしたから、本町周辺には糸偏企業の好景気を当て込んだお茶屋さんが数多く見られました。

アルバイトをしているうちに羽ぶりのよい多くの企業経営者に感化されて、昭和32年にアパレル業界で学生創業をすることになりました。

創業1年目、秋物と冬物の洋服で大変多く売上げました。当時は社員の給料も賞与も全てが、年末の12月31日の大晦日に支給されていましたので、商店街は元日まで買い物客が溢れて大混雑でした。

昭和33年元旦、私は一番電車に乗り、工場の社長に最終の支払清算に参りました。この頃じゃまだ5千円札も1万円札もありません。清算を済ませて家に帰り、押入れのパッキンケースの中を勘定しますと、千円札の現金で約200万、手形が約80万円の大金が残っていました。当時月給は大卒で7,800円位です。私は6,500円より多くの金は持ったことがありませんでしたから、びっくりしました。大阪中の金が私のもとに寄ってきたと思ったほどです。早速1月4日に三菱銀行今里支店に、工場の社長の保証人で取引依頼に参りました。

昭和33年9月、東成の中本町に敷地約30坪の二階建て新築の家を75万で購入しました。2階は縫製工場に改造しミシンと裁断台や機械類を導入し、縫製工場を立ち上げ、コネを頼りに、百貨店のイーゾオーダーを手がけることが出来ました。同時にユニフォームのバイオーダーシステムを構築し、入学期の女子学生服の販売も手がけました。

いずれも良き時代に恵まれ、ニュービジネスとしてはラッキーな滑り出しでした。

しかし繊維の道に進んだら、これが大変です。夜は洋裁学校に通い、パターン（原型）や型紙の作り方を習います。昼は裁断から縫製まで、職人さんの手ほどきを受けながら、実地の勉強することになりました。

私は特別な人生を送って来た訳ではありませんが、なぜ医学部を辞めたかのかとよく尋ねられます。いくつかの理由がありますが、今日のように保険制度が確立していれば、辞めていませんでした。当時の保険制度は、各病院や医院に行くと受付に「保険取り扱い」の木札が下がっている時代です。つまり、医師は威厳と権威が余りにも強すぎました。

我々学生には42歳までは、新人の登用門は開きません。研究生が特別に新しい研究成果を上げても教授の発表が通例です。それも余程気の良い教授に出会えば、協同研究となりますが、そのようなことは稀です。「白い巨塔」という小説がテレビドラマにもなっていますが、私に言わせたらあんなドラマよりもっとキツイ陰湿な世界でした。（中身を申し上げると弊害もあると思いますから申し上げられません）。

ですから私は、医者の世界を諦めた理由について、こう言っています。

「金色夜叉のお宮さんはダイヤモンドに目が眩みましたが、私は金に目が眩みました」と。

しかし、大阪大学医学部では外科志望でしたから、人生とは因縁なのか、タンパク質を切る職業

から抜け出せない宿命と感じました。人間の肉もタンパク質、ウールの生地もタンパク質です。夜中に起こされ急ぎの製作も、よく働かされる運命だと思いました。アパレル屋にしても医者にしても、職業となると、そう簡単に一人前には成長しません。

3) 順調な成長のなかで新たなチャンスをつかむ

昭和 30 年代、池田内閣の所得倍増と化学の進歩と機械文明に支えられて、貧困の時代から、豊かな飽食の時代へ時が移り、働き者でせっかちな日本人気質ができました。また時代の申し子と言うべき、インスタント時代が、国民生活を大きく変えていきます。

しかし高度経済成長期に入っても、都市と田舎の格差はかなりありました。都会は水道完備でガスが普及しても、田舎では一杯のお茶を所望すると谷川に水を汲みに行き、火起こしから始まりです。田舎の人は気が長いと言われるが、当然に物を作る時間は必要ですから、気長に待つ時間が必要になります。とにかく日常生活もファッションも 10 年以上遅れていました。都会の女性はドレスを着用しますが、昭和 36 年頃まで田舎のファッションはモンペ姿が主流でした。

一方、都会の個人消費はますます旺盛になり、消費意欲を刺激するローン制度と割賦販売ができると、人生先取りをして生活をエンジョイする機運が高まり、割賦販売のお店が沢山できました。

とにかく生活の身の回りを中心とした爆発的な消費生活のエネルギーがありました。その時代の潮流・エネルギーに乗って、デパートのイージョーダーや学生服やワーキングコスチュームを主流に順調な伸びをしました。

昭和 42 年 (1967 年)、現リーガロイヤルホテル (京都グランドホテルの渡辺総支配人・開業準備室長) から、「私が 3 年間、アメリカのホテル研修で集めた資料を差上げるからホテルのユニフォームを製作しないか」との打診がありました。

願ってもないチャンス到来です。しかし、新分野であるホテル&レストランのフォーマルウェアは大変な仕事でありました。まず、プレゼンテーションのノーハウが必要です。テキスタイルデザイナーやイラストデザイナーの養成が必要でした。その難しいプレゼンテーションが提供できたのは、趣味の旅行で多くの人との出会いがあったからです。

外国旅行のスカイメートの中にアイビールックの創設者、石津謙介氏 (故人) やファッションデザイナーで、大阪万博の日本館のデザインを手がけた、皇室デザイナーの中村延夫氏、等がおりました。現在でも仲良くご厚誼を頂いております。海外の旅で集積したノーハウや人脈がビジネスとして生かせることを実感しました。以来、「旅 逍遙」、趣味の旅写真 も続けています。

4) 一流から買い一流に売る

企業は一人だけで成立しません。多くの人に関わり、頑張った社員に儲けたお金は還元をする。同じ使うなら社員の喜ぶ使い方をしよう。JAL・727 の国内旅行も高くなっていましたが、同じ金を使うならと、当時は珍しい海外旅行を企画しました。

昭和 44 年の夏期休暇を利用して、社員 30 名ばかりの海外旅行です。香港島のレパレス湾では映画慕情の撮影場所が思い出の一ページに残ります。以来、25 年間続けて、有名都市と一流のホテルで泊まり、一流のレストランで食事をする旅を続けてきました。この旅で学んだことが、後年、タニオカドレスがホテル・レストラン・ユニフォームを提供する日本有数の企業になる原点を作った

のです。

私が学生創業した当初は、今日のニュービジネスと同じく社会的に信頼と信用はありません。ですから、仕入れはすべて現金ですることになりました。（当時は金を持っておりましたが、金持ちだとは言えません）。値段は少々値切っても、現金が魅力で売ってくれるのです。現在でも、弊社の手形発行はほとんどありません。これが倒産に掛からない元になっているようです。クイック販売、早期回収は企業の原点とっております。

弊社の「創業のコンセプト」は、一流の製品を一流で作り、一流の販売店で、一流の顧客に販売することです。これが信用力を高めることにつながったのです。

ホテルコスチュームのプレゼンには多くの知識が必要になります。歴史の勉強もしなければなりません。例えば、日本の和服のルーツは弥生文化の終わり頃に中国は呉の国の商人達が着ていた服が原点で、現在でも呉服と呼ばれております。平安時代は一単衣の着物が主流で、現在のような裏付きはありません。一衣が主流ですから、何枚も重ね着をします。従って平安貴族の十二単衣が見られます。呉服はシルクロードの途中で、朝鮮の気候風土に根を下ろした。燃料に乏しいオンドルに適した裾広がりやの服が、チマチョゴリとして民族衣装に残っています。

紳士服は約 2600 年前にイタリアでその原型が作られましたが、紳士服の文化もそれぞれのお国柄が今日も色濃く残っているわけです。たとえばイタリアの服はノーベンツ、W前の服は男女兼用型でボタンホールは左右共に同じです。フランスの服は、サイドベンツで颯爽とおしゃれにできております。イギリスの服は、センターベンツでコンチネンタル型に出来ている。脇にひも付きで馬に乗りやすい、センターベンツは、馬の鞍に合わせた物です。スペインの服は、W前で、風除けのためにバッチホールが両前に付いています。注意してみると、そのルーツが見えます。

5) 「大阪商人のど根性」はどこへ行った

船場の多くの先輩や先人達に大阪商人のど根性論が語り継がれ、大阪商人の歴史や「しきたり」大阪の街の生い立ちなど、いろいろと教えて頂きました。西岡彦商店は呉服の老舗の社長で、ご存知の方もおられると思いますが、ど根性の本質を「絵」とか「文字」では表現できないと言われております。自分の出生を語って頂き、生のど根性を聞きました。

和田哲の先代社長には、船場商人と大阪商人の違い、お正月の飾りや丁稚の躰け、教育論などよくお聞きしました。南北の道路を「筋」と言い、東西の道路を「通り」と言う。本町通りを境に南北に別れて、昔は北側を本町と呼び、南側を船場と呼ぶ。船場の商人は本町に店を持つことが夢と言われたようです。北側は大阪商人と言われ、格上の商人と言われております。だから現在でも、北の新地で飲むことにこだわる人がいるようです。

本町を境に北へ、安土町、備後町、瓦町、淡路町、平野町、道修町、伏見町、高麗橋、この間に住む人を大阪商人、お公家の言葉で話したようです。おじゃります、は明治時代に電話代が嵩み電話の通信用語で、短く＝おまんがな＝もっと短く＝おまっか＝おま、となって等々。

南側へ船場は久太郎町、北久宝寺町、南久宝寺町、博労町、南船場、心斎橋、この間を船場として、近江商人が多く住んでいたと言われております。

谷町は大和の人が多く、大和村と言われ独特の文化を持っていました。相撲の発祥は奈良の當麻地区と言われ、相撲のひいき筋は現在でも「谷町」と言われる。いずれも昔の話です。

大阪文化は秀吉公の残した遺産で、栄えて来ました。河川や高速道路も掘割の上を利用し大公さ

んの恩恵を頂いておりますが、私を含め皆さんは余り感謝をしておりません。

私の尊敬するユニ・チャーム㈱の会長、高原慶一朗さんが来阪されたとき、クラブ関西で何度か昼食をご馳走して頂きました。高原さんは、「企業の3ボレの精神」ということを私によく言われました。

「良い場所で、良い人達に恵まれ、良い商売をしている。だから私は四国から離れられない」と言われるのです。

私はそのような感謝ができず、つい、繊維屋は儲けの無い、つまらん商売をしているとぼやくことが先になり、商売の情熱が冷めております。「大阪商人のど根性」はどこへ行った。もっと大阪を愛し、感謝しなくてははいけません。あの青春時代の深夜でも働く情熱があれば、現在でも儲かるシステムが十分あると思います。しかし残念ながら現在では土曜日が待ちどろしい、悲しい体質とサラリーマン根性になっております。あのハングリー精神はどこにいったのか、年はとりたくないと思っております。

6) モラトリアム法の行方は？

私はNBFの時代から、NBKとは約25年位のお付き合いのある古い会員です。40年以上のご交誼を頂く先輩に、NBK元副会長の小池俊二さんがおられました。小池さんは大阪府被服工業組合の理事長を20年間務められ、私も副理事長として20年間務めました。

現在私は、日本被服工業組合連合会（日被連）の理事長の重積を頂いております。過日も（2009年11月10日）、東京・霞ヶ関・霞山会館の37階で、日被連の創立50周年記念式典を盛大に開かれ、私も全国の組合連合会の理事長の一人としてここに出席しました。ここには経済産業省始め、厚生労働省、繊維業界では素材メーカー代表に東レ株式会社、下村会長を始め杉本副社長、各紡績や合繊メーカー、繊維業界の代表、国会議員の先生方も10名の出席されていました。

平沼赳夫元通産大臣をはじめ、特に有名な亀井静香金融・郵政改革大臣のお祝いのスピーチがあり、亀井大臣からはモラトリアム法のお話がありました。お日本の企業の98%は中小企業であり、中小企業が元気になれば景気浮上は簡単にできないと、亀井大臣は力説されておりました。詳しい内容は新聞紙上でご覧頂くとして、このモラトリアム法案も通過しておりますので、今後の経過を見守りたいと思います。

ところで、大阪商人には借金を恥であるという伝統があり、大阪の商取引は現金が基準でありました。しかし、いつの時代も経済の規模が大きくなると多くの資金調達（借金）がなされ、色々な歴史を生みます。江戸時代の大名や大店は、両替商から多額の借り入れをして、商いの拡大を図りますが、その借金を完済した事例は耳にしたことが無いようであります。

今日流に申しますと両替商は現在の銀行です。特に大阪の豪商・淀屋事件は歴史にも有名です。江戸時代には全国で94の藩が存在しており、なにわの淀屋から莫大な借金をしていたようですが、中には余りにも借入金の額が莫大で、大藩でも返済ができない。そこで、大口の借り入れ藩や勘定方が返済の方法を談合して、返済をしなくても良い方法は無いかと考えたようであります。

借金の返済を帳消しで済む方法を考えました。不当な金利で、ぼろ儲けをしている。例えば、高金利や淀屋の渡し料や、橋の通行料を徴収する等々で、多角的に金が入るシステムを構築しあごぎに稼いでいる。貸し金の金利も高く人身を苦しめる張本人として淀屋の店主を罪人にしてしまったのです。家禄没収、閉門塾居ということで罪人にすれば、返済をする必要もない。大変都合のよい

方法であり、全国の藩を始め、多くの借金商人は大変に恩恵を被ったという話です。

幾らか講談じみておりますが、大方は事実と言われております。過ぎたるは及ばざるが、如しの、教訓となっているようです。このような歴史があることから、銀行筋ではモラトリアム法の成立は物議をかもしたようです。いずれにしろ、モラトリアム法で中小企業を救済せなければいけないほど、日本経済は高齢化が進み疲弊しているということです。

7) 国民が望んだチェンジはまだこれから

我が国は少子高齢化の世界的に最先端を進んでいますが、人生も後半に掛かると確かに見る世界が狭くなります。日本だけの問題ではありません。すでにお隣の中国でも、一人子政策で少子高齢化は進んでいます。世界で一番若い国のベトナムでも 25 年後に日本と同じ道を通ります。

何処の国も先々は同じ道です。高齢者社会はなぜ怖いか、体力、気力、労力、それより怖いのは、先見性が細ること。目の前を通る道は見えても、10 年～20 年の先見性が見えていない。過去は振り返るが、10 年先は語れない人が大半です。従って高齢化は嫌われ、必要のない邪魔者である。若者に夢や活力を与える教訓や行動力も与えず。只、衰退をしている。

お笑いでも、綾小路きみまろ氏に言わせると、男も女も老人は使ってはならない台詞があるようです。体力の衰えた会長や社長でも高齢化すると「俺に黙って 10 年付いて来い」という言葉は禁句の様です。若者は 10 年先に死ぬような人に付いていかない。

女性も年を取ると、「男って気持ちわるい、触るのやめて」と言いますが、この言葉は男女ともに禁句です。誰も好き好んで、ばあさんに触りません。

こんなにお先の見えにくいなか、おとなしい我が国民もさすがに苛立ち、チェンジを求め、政権交代が起こったのも必然でしょう。過日、徳島で仙谷由人・行政刷新大臣にお会いをする機会がありました。「事業仕分け」「廃止」と「減額」と小気味良く聞こえますが、凄いですねと申しますと、「日本の法令は 7360 も有り、似たような法案が多くあるから、官僚が選別した内の 240 程度の見直しが始まった」とのこと。これは行政側から出した法令で、始めから追及される目録であるようです。

本当の改革はこれからで、古い法案でも一度国会を通過すると法律となり、組織と予算が永久に付き、無駄は幾らでもあるようです。機能も役に立たない過去の法案や法律は排除されると思いますが、鳩山さんが言う戦後の大掃除には、まだまだ大変な時間と労力が掛かるようです。

官房長官の平野博文さんは流石に労働組合の出身者であります。現在では、総理大臣の鳩山由紀夫さんより忙しく、何処に出掛けてもよいが、1 時間以内に官邸に戻ることが義務のようでありませぬ。私が見たところ、誠に実直な好紳士であります。汗は人を裏切らない。努力は必ずむくわれる。信念の人物と見ましたが、いかんせん、政界や財界のコネクションは少なく、人脈作りが最優先だと思います。この人に各階層の人脈が備わると大変な人物に成長されると思います。期待の人です。

8) 趣味の文化は豊かな人材を育てる

最後にプライベートな趣味についてお話させてもらいます。

旅は本当に楽しいですよ、沢山のひとと出会い、すばらしい自然に出会います。

私は旅と写真の話になると、別人になると良く言われます。しかし、旅は決して楽しく気楽なも

のではありません。旅は一時的に自分の環境を変える訳ですから、住み慣れた家や習慣も変わります。当然にリスクを伴うことが前提となります。ですから、常に環境の変化に順応するのが、楽しい旅を味わうこととなります。

私は、旅写真を撮るために、夜中に起きて朝焼けと陽光に向かいます。そのためホテルや旅館の朝食時間に間に合わないこともあります。夕日の撮影は、日の暮れ 30 分前です。夕食時間を外れると迷惑をかけますから、高い宿泊代を支払っても常に低姿勢で接します。ところが最近のお客とご老人方はエゴを丸出しで、ホテルマンに些細なことでクレームを付けているのをよく見かけます。これは感心できません。

旅は気力と体力や、金と暇と体調が揃う時が一番に楽しいですから、挑戦の心が必要です。少なくとも自分のことは自分で出来なければならない。その上に大きなリスクもあります。だから、常日頃から、体力も気力も環境の変化に対応する訓練が必要です。これが旅の醍醐味であります。最近の若い人達は車に頼り、楽な方向に向かい、過ぎております。旅は歩くことから始まるのです。

古来より多くの俳人、小説、絵画、芸人、写真家も、歩いて野山を駆けて、体得し自然の移ろいを感じたことが集積して、感性として現れる。数十年の歳月をかけて、一流になる定義を作ります。人材は厳しいプロの仕事のなかで育ちますが、趣味の文化も豊かな感性をもつ人材を育てるのです。

自然界に大きな歴史があり、人や物にも歴史があります。出会いがあるから物語があります。「古池やかえる飛び込む水の音」という芭蕉の名句にしても、自分の足で歩くから、見たり、聞いたり、できるわけです。車で 60 キロのスピードで走ると小さな池も見えませんが、水音も聞こえません。これが現代病です。

私の写真の師匠は、元大阪芸大の写真部長の高田誠三氏です。師が申すには、写真を志したら、絵心を持って、小説家の文を書け、俳句を読め、天文学を習え、気象学を知れ、修行僧の心を読め、そして良き友人と理解のある家族を作れと教えられました。すべてにおいて努力が必要で、人生に天才はおりません。努力以外の何者でもない。身も心も気力も努力から生まれると申します。

私は趣味の究極は自分を見つめ、自然と宇宙の対話で悟る。野山に仏が見えて一人前です。改めて大自然を悟りの気持ちになり、写真を撮って見ませんか、世情の動きが良く見えてきます。写真を愛する方がいらっしゃいましたら、ご参加してください。

よろしくお願ひします。お願ひを致しまして、頂きました時間が来た様です。

本日はご清聴ありがとうございました。

以 上